

「あつ、揺れてる、地震だ」

「なーに、すぐ止まるよ」

ここは川崎市の下水道工事現場である。地下二十メートル、底は直径六メートル、坪数にする  
と八・五坪ほどの立坑の中にいる。土留めは、凍結工法により施工されていた。

「長いなー」

「おおっ！大きいぞ！」

周囲の凍土（低温で凍らせた土）がミシミシと音を立てた。

「全員地上へ退避！」

作業員は道具を投げ出して、急いで階段を登った。階段は一つしかないのだが、混乱もなく一  
列になって上がってゆく。当然階段も揺れているが、地下の揺れは地上に比べると小さい。地  
震の大きさを実感したのは、地上に出たからだだった。

工事用の大きな水槽が揺れ、中の水が飛び出している。現場は停電になり、各機械は停止し  
た。凍土を維持する電源は、発電機を使用しているので確保されている。凍土が溶ける心配は  
ない。仮に電源がなくなっても、地下の水がいつぺんに解けることはない。長時間にわたって、  
燃料の軽油が入手できなくなれば話は別である。

立坑の脇に停まっていたダンプの運転手に、地震の状況を聞いた。ダンプにはラジオが付い  
ている。放送局も混乱しているようで、一向に要領を得ない。とにかく相当大きな地震が三陸  
で発生したようだ。

地震が治まると、各所の安全点検に入った。幸運なことに、現場に異常はなかった。工事の  
関係先にも、何とか連絡がついた。現場事務所に戻り、今夜の待機職員などのやり繰りを済ま  
せて、新横浜の会社に向かった。

帰社の手段は車しかない。第三京浜はストップ、一般道に行くことになる。道路の混雑は、  
相当なものになっていた。渋滞の原因は二つあった。一つは信号機が止まっているための渋滞、  
もう一つは歩行者による渋滞だった。これは鉄道の駅付近になると、その都度発生していた。  
停電でガソリンスタンドも機能していない。ガス欠の車もあつたに違いない。車が動かない反  
面、ラジオの地震関連放送はじつくり聞くことができた。地震の後に、相当大きな津波が三陸  
を襲っているらしい。画像は見えないので、津波の程度は実感しにくかった。

十五キロくらいの道程を、三時間かけて戻った。会社は十一階にある。当然エレベータは動  
かない。避難した立坑よりも長い階段を登り社内に入ると、以外にオフィスは整然としてい  
た。

「場所が高いから相当揺れたろう」

「立っていられないくらい凄かったよ」

「それより、片付けが大変だったよ」

会社として大きな被害はなかった。

翌日の打ち合わせは済んだが、帰宅の交通機関は皆無になっている。何台かの車に相乗りを  
して、近くの家から順次降ろしてゆくことになった。

私の家は所沢である。あまりにも遠いので、会社に停まることにした。誰もいなくなった社  
内は寂しい。家族の無事が確認できると、急に空腹を感じた。食糧を仕入れるために長い階段

を往復する。階段を歩く音が静けさの中に響き、不安と孤独感を深めていった。

社内に戻り窓辺を見ると、いつもの華やいだ夜景はなかった。外は暗い世界が広がっている。応接室のテレビには、火災で昼間のように明るくなった東北の海が写しだされている。地震の惨状を見ながら眠る応接室のソファは冷たかった。

その後、私は仙台に転勤して復興のために微力を注ぐことになる。

